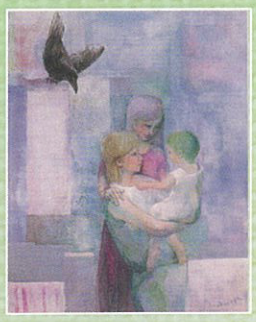
野村 正則 個展 ～40年の筆跡～

平成２６年　６月１０日（火）～１５日（日）９：００～１７：００　大分県立芸術会館

主な出品作品

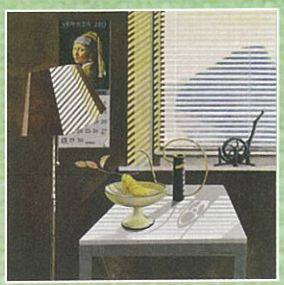
1973年 武蔵野美術大学
卒業制作・受賞作



1984年 主体展出品作

1996年 第３回小磯良平
大賞展・受賞作

1999年 第８回青木繁記念
大賞公募展・受賞作



2013年 第90回春陽展
出品作

『 野村さんのこと 』

野村さんとの出逢いは、母校である武蔵野美術大学の共通絵画研究室に、初めて「修士」のキャリアを持つ助手としての登場でした。もう 40 年ほど前のことです。誠実な人柄と何事にも粘り強い資質は、「院」で身につけた高度な絵画知識と相俟って、研究室の重要なスタッフとして厚い信頼を得るに至りました。

その後乞われて大分に活動の場を移し、以後、大学人として、作家として充実した業績を残していることは、周知の事実であります。

さて、個展開催を機に「作家野村正則」を、独断を含めて見てみますと、第一に彼の出自である南信州の豊かな本物の「山川」に育まれたことにありましょう。土臭く、嘘のない、どっしりとした自然観が、彼の感覚の根底になっているように思います。今や潜在化している「それ」は彼の作品の奥底から、じわりと迫ってくる説得力の源でありましょう。

第二に彼の作品群の中で重要な位置をなす「マンホール」についてです。それが画面に出現するまでの試行錯誤は、過去に幾度か有ったものと比べ、実に重要な内的作業であったと推測します。身を削るような厳しい姿勢を持って求めたものは、主に情緒的な物語性を切り落とすことにあったのでしょう。その過程で「マンホール」に行き着いたのは、必然であったと思います。そこから展開する彼の「無言なる熱視線」により生まれた作品は本人の強い意志により画面が限定されてきます。すべて描かず限定されるが故に、情緒性が姿を消し彼の表現すべき核心が明確に提示されています。「野村芸術」の一つの極みとみます。

本年の「春陽会」に於ける新作に更に新たな展開を拝見し、野村さんの今後に多くの期待を寄せるものです。

数々のハイレベルのコンクール展でも実績を上げ、作家として揺るぎない存在である野村さんに、敢えて先輩からのエールとして記しました。

平成 26 年 5 月

武蔵野美術大学　学長・洋画家　　甲田　洋二

●会期／2014年　6月10日（火）～15日（日）
9：00～17：00

●会場／大分県立芸術会館　第３室
〒870-0152　大分県大分市牧緑町 1-61
TEL 097-552-0077

HP　http://kyouiku.oita-ed.jp/geijutukaikan-b/index.html

●後援／大分合同新聞　OBS 大分放送　OAB 大分朝日放送　TOS テレビ大分